

## 親への信頼感ときょうだい関係との関連性<sup>1, 2</sup>

立教大学大学院現代心理学研究科博士課程前期課程 1年 熊谷 政人

### The Linkage Between Feelings of Trust Toward Parents and the Sibling Relationship

Masato Kumagai (Graduate School of Contemporary Psychology, Rikkyo University)

This study examined the linkage between feelings of trust toward parents and the sibling relationship in consideration of gender, age difference, the gender constellation of the sibling dyad, and birth order. The sample size for this study was 216 undergraduate students and graduate students. Results indicated that there were different linkages between feelings of trust toward parents and the sibling relationship in regard to each abovementioned sibling structural variable. These findings indicate that the sibling constellation plays an important role in the linkage between feelings of trust toward parents and the sibling relationship.

**Key words:** Feeling of trust, Parents, Sibling Relationship

きょうだいは人間関係においても特殊な存在である。きょうだい関係は「タテ」の人間関係と「ヨコ」の人間関係から成り立っている「ナナメ」の人間関係と呼ぶことができ、親子関係とも友達関係とも違うと考えられている(依田, 1990)。人間関係の中でも異質なきょうだい関係を規定する要因として親と子どもの関係性が考えられている。中でも、親からきょうだいへの直接的な関わり方がきょうだい関係と関連していることが示されている。母親と父親の両方が直接的な介入戦略(きょうだい葛藤の問題に踏み込むことや解決することなど)を用いることは、きょうだいとの親密さの低さやきょうだいとの否定的な関係性の高さに関連しており(McHale, Updegraff, Tucker, & Crouter, 2000)、きょうだい葛藤に母親が関わ

らないことは、きょうだいとの親密さと正の関連を示している(McHale et al., 2000)。また、親の温かさにおけるきょうだいの差が増加するとき、きょうだいとの温かさの減少が示され、特に、長子における両親との関係の温かさが末子と比較して増加しているほど、きょうだい間の温かさの増加は小さくなるか、減少することが示されている(Feinberg, McHale, Crouter, & Cumsille, 2003)。また、親からきょうだいへの直接的な関わり方以外にも親への信頼感がきょうだい関係と関連することが考えられる。この関連性について、藤本(2009)は親子関係が良いときょうだい関係も良くなるし、親子関係が悪いと、きょうだい関係も悪くなるという同方向に動く一致仮説があると述べている。愛情はないが束縛がある「愛情のないコントロール」という子育てよりも愛情のある子育ての下で育ったきょうだいはきょうだい関係の尺度において高い得点を示し(Portner & Riggs, 2016)、両親と関わる時間の長さがきょうだいへの親しみやきょうだいとの関わりに肯定的に関係している(McHale et al., 2000)。また、子どもの

<sup>1</sup> 本研究は、平成30年度に立教大学現代心理学部心理学科に提出した卒業論文の一部を加筆・修正を行ったものである。

<sup>2</sup> 本論文の作成にあたり、丁寧に指導して下さいました立教大学現代心理学部の林もも子先生に心より感謝申し上げます。

内的ワーキングモデルを作る子どもの本来の母親とのアタッチメント関係のスタイルは一般的な対人関係や後の複数のアタッチメント関係における原型として役立つ、成人期のきょうだい関係の性質は母親との最初の関係性もしくはきょうだいとの早期な関係性の性質によって影響されるということが示唆されている (Stewart, Verbrugge, & Beilfuss, 1998)。つまり、この一致仮説はアタッチメントの理論を中心として親との間で築かれたアタッチメントがきょうだいとのアタッチメントに作用するという考えが取り入れられていることが考えられる。また、親との交流がきょうだいとの交流を促すことも考えられる。

一方、藤本 (2009) は親と子どもの関係性ときょうだい関係との関連性において、親子関係が悪いと、その親子関係を補償するように、きょうだい関係は良くなるという補償仮説も述べている。親との関係性の質が良くない時、きょうだいとのポジティブな関係性を持つことが実践的なきょうだい間のサポートの交換に強く影響し、きょうだいが家族交流における補償の潜在的な役割となることが示唆されている (Voorpostel & Blieszner, 2008)。さらに、親のサポートが低い条件下では、男性のきょうだいからより多くのサポートを受けている学生はより高い成績を示している (Milevsky & Levitt, 2005)。つまり、親との関係性が希薄になる場合、きょうだい同士の結びつきが強まり、きょうだい関係が良くなることが考えられる。また、きょうだいの中では、親の代わりとなったきょうだいがもう一人のきょうだいに対してサポートや安定したアタッチメント関係を与えることも考えられる。

親への信頼感を測定する際には、親としての信頼感と親という個人への信頼感が存在することが考えられる。中井 (2013) は母親に対する信頼感尺度における3因子を「母親役割」、「母親への安心感」、「母親への不信」と命名している。すなわち、親への信頼感には、ポジティブな特性とネガティブな特性があると考えられ、ポジティブな特性には親役割を果たすことへの信頼感と、親役割

とは別に親個人への信頼感があることが考えられる。以上のことから、本研究では、親への信頼感には親としての信頼感と親個人への信頼感があると考え、親への信頼感の2側面がきょうだい関係に関わっているかを検証する。

親への信頼感ときょうだい関係との関連性は、きょうだいの属性によって異なることが考えられる。まず、きょうだいの性別の観点では、女性において、きょうだいに会う頻度がもたらすきょうだいのサポートへの効果を両親と会う頻度が強化することを示している (Voorpostel & Blieszner, 2008)。また、きょうだいの出生順位という観点では長子が親代わりとなり、末子の世話をする可能性が考えられる。特に、長子と次子との年齢差が離れている場合、長子の親代わりの要素が強くなることが考えられる。

以上のことから、本研究では、親への信頼感ときょうだい関係との関連性が性別、きょうだいの年齢差、きょうだいの性別の組み合わせ、出生順位の4つのきょうだいの属性によって、どのように異なるのか検証することを目的とする。

## 方法

### 調査対象者と手続き

調査対象者は2人きょうだいである関東圏内大学生および大学院生216名 (18歳から29歳までの男性63名、女性153名、平均年齢19.3歳、 $SD = 1.5$ ) であった。2018年5月16日から2018年6月22日までの間に実施した。大学における講義を通して集団調査法の実施に加えて、雪だるま式サンプリングによる個人調査法を実施した。本調査は2人きょうだいである人のみを対象として無記名で行われた。

### 尺度構成

質問紙は、フェイス項目と以下の3つの尺度から構成した。

**フェイス項目** 性別、年齢、学年、現在の住居形態、調査対象者のきょうだいについての回答を

求めた。調査対象者のきょうだいに関する質問には、きょうだいの属性、年齢差、きょうだいとの現在の住居形態、同居年数、別居経験がある場合には別居年数の回答を求めた。

**日本語版 Lifespan Sibling Relationship Scale (LSRS)** 熊谷 (2018) において、きょうだい関係尺度である Riggio (2000) の Lifespan Sibling Relationship Scale (LSRS) を邦訳し、信頼性と妥当性を確認した日本語版 LSRS から成人期のきょうだい関係を測定する「きょうだいとの親しい交流」、「きょうだいへの信頼感」の2因子23項目を使用した。評定方法として「まったくあてはまらない」から「非常によくあてはまる」の5件法で回答を求めた。

**母親への信頼感尺度、父親への信頼感尺度** 親への信頼感ときょうだいとの関係性のつながりを明らかにするため、中井 (2013) の「中学生の母親に対する信頼感尺度」と「中学生の父親に対する信頼感尺度」を使用した。これらの尺度は面接法に基づき、母親用と父親用がそれぞれ別に作成されたものであった。母親への信頼感尺度、父親への信頼感尺度は、中井 (2013) において、信頼性と妥当性が確認されていた。母親に対する信頼感尺度と父親に対する信頼感尺度において所々重複する箇所が見受けられ、母親もしくは父親のみに見られた項目がどちらの親にも共通するのではないかと考えられたため、本研究では両尺度の項目を合わせて28項目を使用した。したがって、両尺度の文章は基本的には同じであり、「母親」もしくは「父親」という言葉の部分のみ異なっている。評定方法として「まったくあてはまらない」から「非常によくあてはまる」の4件法で回答を求めた。

## 結果

母親への信頼感を測定する28項目について因子分析（主因子法、プロマックス回転）を行ったところ、スクリープロットの形状から2因子構造と判断された。どちらにも.35以上の高い負荷を

示した2項目と2因子に.35未満の低い負荷を示した1項目を除外し、再度因子分析を行った。その結果、スクリープロットの形状から2因子構造と判断された。第1因子は、「母親は家族や私のために頑張ってくれていると思う。」、「母親は私に愛情をくれていると思う。」などの15項目に高く負荷しており、「母親役割」因子と命名した。第2因子は、「母親には気軽に何でも話せると思う。」、「母親にならいつでも相談ができると感じる。」などの10項目に高く負荷しており、「母親の支え」因子と命名した。各因子に高い負荷量を示した(.35以上)項目により各因子を構成した。また、各因子においてクロンバックの $\alpha$ 係数を用いた信頼性分析をしたところ、「母親役割」因子においては $\alpha = .95$ を示し、「母親の支え」因子においては $\alpha = .92$ という高い内的一貫性が示された。

父親への信頼感を測定する28項目について因子分析（主因子法、プロマックス回転）を行ったところ、スクリープロットの形状から2因子構造と判断された。2因子に.35以上の高い負荷を示した5項目を除外し、再度因子分析を行った。その結果、スクリープロットの形状から2因子構造と判断された。第1因子は、「父親は家族や私のために頑張ってくれていると思う。」、「父親は自分の仕事をしっかりとやっていると思う。」などの15項目に高く負荷しており、「父親役割」因子と命名した。第2因子は、「父親には気軽に何でも話せると思う。」、「私が不安なとき、父親に話を聞いてもらおうと安心する。」などの8項目に高く負荷しており、「父親の支え」因子と命名した。各因子に高い負荷量を示した(.35以上)項目により各因子を構成した。また、各因子においてクロンバックの $\alpha$ 係数を用いた信頼性分析をしたところ、「父親役割」因子においては $\alpha = .95$ を示し、「父親の支え」因子においては $\alpha = .91$ という高い内的一貫性が示された。

きょうだい関係を測定する23項目について因子分析（主因子法、プロマックス回転）を行ったところ、スクリープロットの形状から2因子構造

と判断された。第1因子は、「私のきょうだいと私はたくさんを一緒にする。」「私のきょうだいと私は一緒に遊びに行く。」などの12項目に高く負荷しており、「きょうだいとの親しい交流」因子と命名した。第2因子は、「私は私のきょうだいを誇りに思っている。」「私は私のきょうだいを尊敬する。」などの8項目に高く負荷しており、「きょうだいへの信頼感」因子と命名した。各因子に高い負荷量を示した(.35以上)項目により各因子を構成した。また、各因子においてクロンバックの $\alpha$ 係数を用いた信頼性分析をしたところ、「きょうだいとの親しい交流」因子においては $\alpha = .93$ を示し、「きょうだいへの信頼感」因子においては $\alpha = .92$ という高い内的一貫性が示された。

また、母親への信頼感の下位尺度間および父親への信頼感の下位尺度間の相関が高いことから、親への信頼感ときょうだい関係の関連性に疑似相関が疑われたため、それぞれの尺度にある親役割因子と親の支え因子のそれぞれで統制した偏相関分析を行った。その結果、母親への信頼感尺度においては、母親の支えを統制した場合、母親役割はきょうだいとの親しい交流とは負の相関を示し( $r = -.19, p < .01$ )、きょうだいへの信頼感とは相関が有意でなかった( $r = -.03, n.s.$ )。また、母親役割を統制した場合、母親の支えはきょうだいとの親しい交流ときょうだいへの信頼感両方に正の相関を示した( $r = .35, p < .01, r = .27, p < .01$ )。また、父親への信頼感尺度においては、父親の支えを統制した場合、父親役割はきょうだいとの親しい交流ときょうだいへの信頼感の両方とは相関が有意でなかった( $r = -.19, n.s., r = .12, n.s.$ )。また、父親役割を統制した場合、父親の支えはきょうだいとの親しい交流ときょうだいへの信頼感両方に正の相関を示した( $r = .19, p < .01, r = .16, p < .05$ )。

さらに、回答者の性別、きょうだいとの年齢差、きょうだいの性別の組み合わせ、回答者の出生順位によって、きょうだいの属性による親への信頼感からきょうだい関係への予測に変化があるかを検討するため、Step1できょうだいの属性、Step2で親への信頼感を独立変数とし、きょうだい関係

を従属変数とした階層的重回帰分析を行った。回答者の性別による親への信頼感からきょうだい関係への予測では、男性において、Step2で母親への信頼感を回帰式に投入した結果、母親役割からきょうだい関係への予測は有意でなかったが、母親の支えからきょうだいとの親しい交流ときょうだいへの信頼感の両方への予測は正の予測を示した( $\beta = .82, p < .01, \beta = .48, p < .01$ )。一方、女性において、Step2で母親への信頼感を回帰式に投入した結果、母親の支えからきょうだいとの親しい交流ときょうだいへの信頼感の両方への予測は正の予測を示した( $\beta = .51, p < .01, \beta = .50, p < .01$ )。また、Step2で父親への信頼感を回帰式に投入した結果、父親の支えからきょうだいとの親しい交流ときょうだいへの信頼感の両方への予測は正の予測を示した( $\beta = .28, p < .05, \beta = .47, p < .01$ ) (Table1)。

きょうだいとの年齢差による親への信頼感からきょうだい関係への予測に変化があるかを検討するため、年齢差の高群低群による予測の比較を行った。なお、年齢差の2群分けは年齢差の中央値が3歳( $SD = 1.69$ )であったため、低群を3歳以下、高群を4歳以上として2群に分けた。低群において、Step2で母親への信頼感を回帰式に投入した結果、母親役割からきょうだいとの親しい交流へ負の予測を示し( $\beta = -.39, p < .01$ )、母親の支えからきょうだいとの親しい交流ときょうだいへの信頼感の両方への予測は正の予測を示した( $\beta = .63, p < .01, \beta = .58, p < .01$ )。また、Step2で父親への信頼感を回帰式に投入した結果、父親の支えからきょうだいとの親しい交流ときょうだいへの信頼感の両方への予測は正の予測を示した( $\beta = .40, p < .05, \beta = .47, p < .01$ )。一方、高群において、Step2で母親への信頼感を回帰式に投入した結果、母親の支えからきょうだいとの親しい交流への予測は正の予測を示した( $\beta = .68, p < .01$ ) (Table2)。性別の組み合わせが同性であるきょうだいにおいて、Step2で母親への信頼感を回帰式に投入した結果、母親の支えからきょうだいとの親しい交流への予測は有意であった( $\beta = .61, p < .01$ )。一方、

性別の組み合わせが異性であるきょうだいにおいて、Step2で母親への信頼感を回帰式に投入した結果、母親の支えからきょうだいとの親しい交流ときょうだいへの信頼感の両方への予測は正の予

測を示した( $\beta = .61, p < .01, \beta = .40, p < .01$ )。また、Step2で父親への信頼感を回帰式に投入した結果、父親の支えからきょうだいとの親しい交流の予測は正の予測を示した( $\beta = .53, p < .01$ ) (Table3)。

Table 1  
性別における親への信頼感からきょうだい関係への階層的重回帰分析 (N = 216)

	男性 (n = 63)						女性 (n = 153)					
	きょうだいとの親しい交流			きょうだいへの信頼感			きょうだいとの親しい交流			きょうだいへの信頼感		
	$\beta$	R <sup>2</sup>	$\Delta R^2$	$\beta$	R <sup>2</sup>	$\Delta R^2$	$\beta$	R <sup>2</sup>	$\Delta R^2$	$\beta$	R <sup>2</sup>	$\Delta R^2$
Step2		.44**	.38**		.38*	.24**		.25**	.10**		.20**	.11**
母親役割	-.27			.05			-.27			-.21		
母親の支え	.82**			.48**			.51**			.50**		
		.25	.19**		.27	.14*		.26**	.11**		.30**	.20**
父親役割	-.08			.49*			.07			-.01		
父親の支え	.53*			-.10			.28*			.47**		

注) Step1において、住居形態、きょうだいの属性、年齢差、同居年数、別居年数、きょうだいとの住居形態、別居経験、きょうだいの性別組み合わせ、本人の出生順位、きょうだいの組み合わせを統制した。\* $p < .05$ , \*\* $p < .01$ を表す。

Table 2  
年齢差における親への信頼感からきょうだい関係への階層的重回帰分析 (N = 216)

	低群 (n = 134)						高群 (n = 82)					
	きょうだいとの親しい交流			きょうだいへの信頼感			きょうだいとの親しい交流			きょうだいへの信頼感		
	$\beta$	R <sup>2</sup>	$\Delta R^2$	$\beta$	R <sup>2</sup>	$\Delta R^2$	$\beta$	R <sup>2</sup>	$\Delta R^2$	$\beta$	R <sup>2</sup>	$\Delta R^2$
Step2		.28**	.14**		.31**	.15**		.33**	.18**		.21	.07
母親役割	-.39**			-.24			.68**			.29		
母親の支え	.63**			.58**			-.23			-.02		
		.27**	.14**		.35**	.20**		.25	.10*		.25	.11*
父親役割	-.02			.01			.36*			.32		
父親の支え	.40**			.47**			-.27			.05		

注) Step1において、性別、住居形態、きょうだいの属性、同居年数、別居年数、きょうだいとの住居形態、別居経験、きょうだいの性別組み合わせ、本人の出生順位、きょうだいの組み合わせを統制した。\* $p < .05$ , \*\* $p < .01$ を表す。

Table 3  
性別の組み合わせにおける親への信頼感からきょうだい関係への階層的重回帰分析 (N = 216)

	同性 (n = 106)						異性 (n = 110)					
	きょうだいとの親しい交流			きょうだいへの信頼感			きょうだいとの親しい交流			きょうだいへの信頼感		
	$\beta$	R <sup>2</sup>	$\Delta R^2$	$\beta$	R <sup>2</sup>	$\Delta R^2$	$\beta$	R <sup>2</sup>	$\Delta R^2$	$\beta$	R <sup>2</sup>	$\Delta R^2$
Step2		.24**	.13**		.15	.11**		.26**	.18**		.36**	.11*
母親役割	-.35			-.25			-.22			.09		
母親の支え	.61**			.53**			.61**			.40**		
		.19*	.09**		.19*	.15**		.27**	.18**		.36**	.19**
父親役割	-.05			.15			.10			.21		
父親の支え	.27			.29			.53**			.27		

注) Step1において、性別、住居形態、きょうだいの属性、年齢差、同居年数、別居年数、きょうだいとの住居形態、別居経験、本人の出生順位、きょうだいの組み合わせを統制した。\* $p < .05$ , \*\* $p < .01$ を表す。

Table 4  
 出生順位における親への信頼感からきょうだい関係への階層的重回帰分析 (N=216)

	長子 (n = 120)						次子 (n = 96)					
	きょうだいとの親しい交流			きょうだいへの信頼感			きょうだいとの親しい交流			きょうだいへの信頼感		
	$\beta$	R <sup>2</sup>	$\Delta R^2$	$\beta$	R <sup>2</sup>	$\Delta R^2$	$\beta$	R <sup>2</sup>	$\Delta R^2$	$\beta$	R <sup>2</sup>	$\Delta R^2$
Step2		.34**	.16**		.31**	.16**		.24*	.13**		.31**	.12**
母親役割	-.34*			-.12			.46*			.02		
母親の支え	.63**			.50**			.12			.36		
		.32**	.14**		.38**	.23**		.20	.10**		.26*	.08*
父親役割	-.04			.06			.16			-.09		
父親の支え	.41**			.45**			.20			.07		

注) Step1において、性別、住居形態、きょうだいの属性、年齢差、同居年数、別居年数、きょうだいとの住居形態、別居経験、きょうだいの性別組み合わせ、きょうだいの組み合わせを統制した。\* $p < .05$ , \*\* $p < .01$ を表す。

長子の回答者において、Step2で母親への信頼感を回帰式に投入した結果、母親役割からきょうだいとの親しい交流へは負の予測を示した ( $\beta = -.34, p < .01$ )。母親の支えからきょうだいとの親しい交流ときょうだいへの信頼感の両方への予測は正の予測を示した ( $\beta = .63, p < .01, \beta = .50, p < .01$ )。また、Step2で父親への信頼感を回帰式に投入した結果、父親の支えからきょうだいとの親しい交流ときょうだいへの信頼感への予測は正の予測を示した ( $\beta = .41, p < .01, \beta = .45, p < .01$ )。次子の回答者において、Step2で母親への信頼感を回帰式に投入した結果、母親の支えからきょうだいとの親しい交流への予測は正の予測を示した ( $\beta = .46, p < .05$ ) (Table4)。

### 考察

本研究では、性別、きょうだいの年齢差、きょうだいの性別の組み合わせ、出生順位の4つのきょうだいの属性の観点から親への信頼感ときょうだい関係との関連性の違いを検証した。まず、性別における親への信頼感ときょうだい関係との関連性の違いを検証した。その結果、女性では父親の支えがきょうだい関係を予測することが見られたが、男性では見られなかった。きょうだいの組み合わせが異性である場合にも、同様に父親の支えがきょうだい関係を予測した。異性のきょうだいである場合には回答者またはきょうだいに女

性が含まれるため、きょうだいの中の1人が女性であることが結果に影響した可能性が考えられる。大島(2013)は、夫婦間の信頼感及び父からの関わりと子の心理的健康の影響関係において性差があると述べている。その研究では、子が娘の場合、母親の夫への信頼感が高いほど、母から子への支持的関わりも多くなり、娘の認識する父からの支持的関わりも増加することが示されたが、子が息子の場合にはそのような関係は見られなかった。また、娘の場合には父親から支持的に関わってもらったという認識が、娘の自己肯定感を高めることも示されているが、息子の場合にはそのような関係は見られなかったという。つまり、女性の場合には母親に同一化することが考えられ、母親が父親へ信頼感を抱くことにより、娘も父親への信頼感を抱くことが考えられる。そして、その父親への信頼感が娘に対して自己肯定感を向上させる等の精神的安定性を供給することにより、きょうだい関係の親密さを促進することが考えられる。つまり、女性にとっては母親から父親への信頼感が娘に伝播し、娘から父親への信頼感を抱くことにより、女性のきょうだい関係は安定する可能性が考えられる。また、男性には父親の支えときょうだい関係の間に関連が見られなかったことについては、男性が父親に同一化しないことが考えられ、父親から母親への信頼感が息子に伝播し、男性が母親への信頼感を抱くことで、男性のきょうだい関係が安定する可能性のないこと

が考えられる。また、男性がそもそもあまり親からの支えを必要としない可能性も考えられる。

次に、年齢差における親への信頼感ときょうだい関係との関連性の違いを検証した。その結果、年齢差が大きいきょう代いは母親の支えからきょうだいとの親しい交流への正の予測をした一方、年齢差が小さいきょう代いは母親役割からきょうだいとの親しい交流に負の予測をし、父親の支えからきょうだい関係に正の予測をした。先行研究のなかでは年齢差が大きいきょうだいよりも年齢差が小さいきょう代いがより葛藤的であると報告したことが示されている (Furman & Buhrmester, 1985, Stocker, Lanthier, & Furman, 1997)。つまり、年齢差の小さい方が競争になりやすく、葛藤関係になりやすいことが推測される。また、本研究の結果において、母親役割への信頼がきょうだい関係に負の予測をしたことから、母親役割への信頼が母親の干渉に対する肯定的な評価だと考えると、競争しやすい年齢差の小さいきょうだい関係において、親の干渉が葛藤を維持、激化した可能性が考えられる。

さらに、回答者の出生順位における親への信頼感ときょうだい関係との関連性について検証した。その結果、次子の場合、母親の支えからきょうだいとの親しい交流への正の予測をした一方、長子の場合、母親役割からきょうだいとの親しい交流へ負の予測をし、母親と父親の支えがきょうだい関係へ正の予測をしていた。長子は母親の方略を直接モデル化するため (Bryant & Crockenberg, 1980)、親への信頼感ときょうだい関係に多くの関連があったのではないかと考えられる。また、親の差別的養育が正当であると知覚した子どもはきょうだい関係がより肯定的なものであり、その関係性が特に長子において、より顕著であることや (Kowal & Kramer, 1997)、養育のひいきを求めるために、防衛的にきょうだい比較を用いることが示されている (Feinberg, Neiderhiser, Simmens, Reiss & Hetherington, 2000)。それらのことから親のひいきときょうだい関係は密な関係であり、親の介入に敏感な長子におい

てのみ、その関係が顕著にみられたと考えられる。特に、日本では、母親の方が直接養育に関わる時間が長い (内閣府男女共同参画局, 2017)、母親役割への信頼がきょう代いの行動的側面における関係性に大いに関わっていると考えられる。

本研究では、以上のように、様々なきょう代いの属性による親への信頼感ときょうだい関係との関連性の違いを検証したが、いくつかの限界が考えられる。その一つは本研究が2人きょう代いのうちの1人による自己報告式質問紙であったことである。2人きょう代いのうちの1人による自己報告式質問紙の場合、きょう代いの1人が知覚している主観的な情報しか得られず、もう1人のきょうだいからのきょうだい関係の情報を得ることができなかった。そのため、将来における研究では自宅にて、きょうだいそれぞれに自己報告式質問紙を回答するよう教示し、きょうだい全員の回答をもってきょうだい間の比較をすることが必要であると考えられる。また、標本を分割して分析することによって、標本数が少なくなったことによる分析結果の歪みが考えられる。そのため、将来研究ではより大規模なきょうだい研究が必要であると考えられる。

以上のような限界があったが、本研究はきょうだい関係に影響する要因を明らかにし、きょうだい関係を理解する新たな観点を得ることにより、きょうだいへの介入についての知見が得られたという臨床的な意義があると考えられる。本研究の結果として、親への信頼感ときょうだい関係との関連性は、きょう代いの属性によって異なることが示された。特に年齢差が小さいきょうだいや長子において、きょうだい間の問題の根幹に親ときょう代いの関わり方の問題があることが示唆された。年齢差が小さいきょうだいや長子において、きょうだい間の問題について親に援助をする時には、親と、各子どもとの関係を吟味していくことが特に重要であることが示唆されたと言えよう。

## 引用文献

- Bryant, B. K., & Crockenberg, S. B. (1980). Correlates and Dimensions of Prosocial Behavior: A Study of Female Siblings with Their Mothers. *Child Development, 51*, 529-544.
- Feinberg, M. E., Neiderhiser, J. M., Simmens, S., Reiss, D., & Hetherington, M. E. (2000). Sibling Comparison of Differential Parental Treatment in Adolescence: Gender, Self-Esteem, and Emotionality as Mediators of the Parenting-Adjustment Association. *Child Development, 71*, 1611-1628.
- Feinberg, M. E., McHale, S. M., Crouter, A. C., & Cumsille, P. (2003). Sibling differentiation: Sibling and Parent Relationship Trajectories in Adolescence. *Child Development, 74*, 1261-1274.
- 藤本 修 (編) (2009). きょうだい —— メンタルヘルスの観点から分析する ナカニシヤ出版
- Furman, W., & Buhrmester, D. (1985). Children's Perceptions of the Qualities of Sibling Relationships. *Child Development, 56*, 448-461.
- Kowal, A. M., & Kramer, L. (1997). Children's understanding of parental differential treatment. *Child Development, 68*, 113-126.
- 内閣府男女共同参画局 (2017). 男女共同参画白書 平成 29 年度版 Retrieved from [http://www.gender.go.jp/about\\_danjo/whitepaper/h29/zentai/html/zuhyo/zuhyo01-03-08.html](http://www.gender.go.jp/about_danjo/whitepaper/h29/zentai/html/zuhyo/zuhyo01-03-08.html) (2018 年 11 月 26 日取得)
- 熊谷 政人 (2018). 親への信頼感ときょうだい関係との関連性 立教大学現代心理学部心理学科卒業論文, (未公刊)
- McHale, S. M., Updegraff, K. A., Tucker, C. J., & Crouter, A. C. (2000). Step In or Stay Out? Parents' Roles in Adolescent Siblings' Relationships. *Journal of Marriage and the Family, 62*, 746-760.
- Milevsky, A., & Levitt, M. J. (2005). Sibling support in early adolescence: Buffering and compensation across relationships. *European Journal of Developmental Psychology, 2*, 299-320.
- 中井 大輔 (2013). 中学生の親に対する信頼感と学校適応感との関連 発達心理学研究, 24, 539-551.
- 大島 聖美 (2013). 夫婦間の信頼感と両親からの支持的関わりが若者の心理的健康に与える影響の男女差 発達心理学研究, 24, 55-65.
- Portner, L. C., & Riggs, S. A. (2016). Sibling Relationships in Emerging Adulthood: Associations with Parent-Child Relationship. *Journal of Child and Family Studies, 25*, 1755-1764.
- Riggio, H. R. (2000). Measuring attitudes toward adult sibling relationships: The lifespan sibling relationship scale. *Journal of Social and Personal Relationships, 17*, 707-728.
- Stewart, R. B., Verbrugge, K. M., & Beilfuss, M. C. (1998). Sibling relationships in early adulthood: A typology. *Personal Relationships, 5*, 59-74.
- Stocker, C. M., Lanthier, R. P., & Furman, W. (1997). Sibling Relationships in Early Adulthood. *Journal of Family Psychology, 11*, 210-221.
- Voorpostel, V., & Blieszner, R. (2008). Intergenerational Solidarity and Support Between Adult Siblings. *Journal of Marriage and Family, 70*, 157-167.
- 依田明 (1990). きょうだいの研究 大日本図書

——2019.9.30 受稿, 2019.12.16 受理——